View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

清末における女子の日本留学と日中間の知識遷移の研究 : 留日女子新聞・雑誌を中心として [論文要旨及び審査の要旨]

著者	張 淑?
発行年	2019-09-20
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第755号
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018358

［10］

氏　　名	張（ちょう）　淑婷（しゅくてい）
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学　位　記　番　号	東アジア文化博第 51 号
学 位 授 与 の 日 付	2019 年 9 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学　位　論　文　題　目	清末における女子の日本留学と日中間の知識遷移の研究－留日女子新聞・雑誌を中心として
論　文　審　査　委　員	主 査　教　授　内田　慶市
	副 査　教　授　藤田　髙夫
	副 査　准教授　池尻　陽子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は清末における中国留日女子紙誌（新聞・雑誌）を対象とし、新聞・雑誌の刊出された背景と内容に着目して、中国女子留学生達がどのように日本で接触した知識を認識したのか、その影響でどのような理想的女性像を求めたのかを分析し、近代女子教育や女性解放思想を彼女たちが如何にして中国に伝達したかを論ずることで、中国女子の役割だけでなく、西学東漸の「ヨーロッパ発、日本経由、中国行き」という道筋における日本が果たした役割をも明らかにすることを目的としたもので、以下のような構成となっている。

序　章

第一章　清末における女子の日本留学

　第一節　清末の女子生活における新しい風潮

　第二節　明治期における日本の女子教育

　第三節　女子留学生の規模および在日活動

　まとめ

第二章　早期の女子留学生と『江蘇』「女学論文・文叢」

　第一節　　早期の女子留学生と「共愛会」

　第二節　『江蘇』と「女学論文・文叢」

　第三節　「女学論文・文叢」の内容

　第四節　「女学論文・文叢」に見られる女性像

まとめ
第三章　秋瑾と『白話報』
第一節　秋瑾の生涯と来日経緯
第二節　秋瑾の在日活動と『白話』
第三節　秋瑾の主張および日本の影響
まとめ
第四章　燕斌と『中国新女界雑誌』
第一節　『中国新女界雑誌』 の出版と収集
第二節　『中国新女界雑誌』 の内容
第三節　『中国新女界雑誌』 に見られる日本の影響
まとめ
第五章　何震と『天義報』
第一節　『天義報』の創刊
第二節　『天義報』に見られる日本的影響
第三節　『天義報』に見られる西学東漸の道筋
まとめ
第六章　唐群英と『留日女学会雑誌』
第一節　唐群英の生涯について
第二節　「留日女学会」と『留日女学会雑誌』
第三節　『留日女学会雑誌』の内容
第四節　『留日女学会雑誌』の特徴
まとめ
結　論

先ず，第一章では、清末における中国人女子の日本への留学に関して、留学前の生活状況や日中両国における女性生活、女子教育の発展などの背景を分析している。特に、19 世紀半ばの西洋文化の中国への伝播とともに、「不纏足」運動、女学堂など新たな風潮が中国の女性生活において現れ、宣教師の教会女学堂に刺激された「教育救国論」などの思潮の下での全国規模での女学堂の展開や女性教員の不足という具体的な問題も指摘されている。

第二章では、早期の女子留学生と雑誌『江蘇』と『女学論文・文叢』を取り上げ、その内容を分析し、早期女子留学生が主に中国の女子教育の振興及び、女権の獲得という二つの方面に関心を寄せていたということを指摘している。また、早期女子留学生が追求した理想的女性像は梁啓超が主張していたような「国民の母」ではなく、「女子国民」という概念に注目していたことも明らかにされている。

第三章では秋瑾と『白話』を取り上げているが、秋瑾の渡日経緯や彼女の実践女学校への入校についての新しい派遣が見られ、また、「演説練習会」の設立、『白話』の創刊、「実

行共愛会」の創立等についても詳しい論述がなされている。

第四章では燕斌と『中国新女界雑誌』について論述しているが、ここでもこれまでの研究には見られなかった新しい知見が示されている。

第五章は何震と『天義報』について論じており、日本の社会党との関係やアナキズムの受容の仕方について詳しく考察している。

第六章では唐群英と『留日女学会雑誌』を取り上げ、唐群英の生涯、渡日経歴、そして彼女が 1911 年に設立した「留日女学会」、さらに、その機関誌である『留日女学会雑誌』について詳しく論述し、同誌における「良妻賢母」と「女子国民」の主張の混同や、女性像の多様性の出現等が論じられている。

結論としては、女子の日本留学と知識遷移の実態、また、それらにおける日本の果たした役割を「ヨーロッパ発、日本経由、中国行き」という西学東漸の道筋の一つとして論じている。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本論文は清末における中国留日女子新聞・雑誌のうち、代表的な五つの新聞・雑誌を対象とし、その刊行の社会的背景とその目的、また、当時の留日女子学生が如何にして日本で新しい知識に触れ、そのことでどのような女性観の変化が生まれたのか、また、そうした新しい女性観が如何にして中国に伝播され、社会に影響を及ぼしたのかを論じた意欲的な論考である。

本論文ではこれまでの先行研究では見られなかった新しい知見も示されている。それは留日女子学生の雑誌・新聞発行といった活動や女性観の変遷のみならず、そうした知識の遷移を当時の西学当然の一つの道筋、つまり、「ヨーロッパ発、日本経由、中国行き」という過程の中でとらえようとする試みである.

また、たとえば、秋瑾などについては、これまでにも多くの研究があるが、本論文で取り上げられた「白話」の創刊とその主張は今後、中国における白話文学運動史、文体論研究において大きな資料となるはずで、こうした新しい資料の発掘も本論文の大きな成果の一つである。

留日女子学生の日本で吸収した知識の類型に関する結論も極めて妥当ものであり、本論文の優れた点と言えよう。

もちろん、今回、同時期の日本の女子新聞や雑誌とのつながりについてはほとんど触れられてはおらず、今後の課題ではある。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。